



Title	アイヌ語の否定表現：類型論的観点から
Author(s)	ヌルミ, ユッシ; Nurmi, Jussi
Citation	アイヌ・先住民研究, 3, 83-115
Issue Date	2023-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.3.083
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88323
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_3_Nurmi.pdf



【論文】

アイヌ語の否定表現 －類型論的観点から－

ヌルミ・ユッシ*

要 旨

本研究では現在まで明らかにされていない、そしてあまり研究対象とされていないアイヌ語の否定表現を類型論的な観点から調べることにする。否定はある命題の真偽を表すのみならず、様々なコンテキストによる語用論的な意味も見られる。本研究では、Miestamo (2016) の方法を参考にし、アイヌ語における否定を総合的にまとめることを目標とする。また、先行研究や文法書などに具体的に扱われていない、統語的に否定だが、語用上ではそれ以上の意味を持つ否定表現にも注目する。また、本研究ではより幅広くアイヌ語の否定表現を調査するために、様々なジャンルのアイヌ語テキストの分析をしてきた。本稿はアイヌ語の統語的な否定を一般的にまとめたものだが、今後の研究すべき対象や本稿で解決できなかったものを指摘することを示したものである。

キーワード：アイヌ語、否定、類型論、語用論

1. はじめに

否定というのは専ら人間の言語に現れる、統語論ばかりでなく、意味論や語用論の原則に基づいている自然言語における最も複雑な現象の一つである (Horn 2010: 1)。否定は言語普遍的な要素であることから、そのコミュニケーションにおける重要性がわかるのであろう (Roitman 2017: vii)。否定は普段、いわゆる真理値の観点からみられるが、コミュニケーション上に様々な機能を持ち、多くの役割を果たしていると考えられる。

アイヌ語は近年、統語的研究が多くされており、否定についても一般的な使い方の紹介 (Tamura 2000, 佐藤 2008, Bugaeva 2012 など) が含まれているものがある。また、例えば高橋 (2016) では北海道アイヌ語の十勝方言の標準的否定 (*standard negation*) に関して考察されており、否定およびアスペクトの関連性が指摘されている。しかし、アイヌ語の否定表現にはまだ問題点が残っている。例えば否定のスコープはアイヌ語でどのように決定されるのかは、まだ完全に確認されていない。

そこで、本研究では主に北海道方言の沙流方言を主に扱うが、アイヌ語の否定表現を類型論的に

* 北海道大学博士後期課程

** 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。

まとめることを目的とする。研究資料として『アイヌ語音声資料』（田村 1984–89）を使用してきた。また、いくつかのアイヌ語沙流方言の辞典（田村 1996、萱野 2002）も参考にした。本研究では Miestamo（2016）による研究対象となる言語の否定表現を研究する際に用いられるアンケート（*Questionnaire for describing the negation system of a language*）¹を用い、アイヌ語の様々な否定構造・表現を類型論的かつ語用論的な観点からまとめることを目標とする。このような、アイヌ語の否定表現を総合的に考察したものはこれまで確認できていないため、アイヌ語の類型論的研究及びアイヌ語の理解を深めるために、アイヌ語の否定表現をより詳しく調べ、論文にまとめることとした。

2. 文否定

否定は一般に文レベルにおける否定、つまり大幅に文全体を対象にする文否定（*sentential negation*）そして、文の一部のみが否定の対象になる構成素否定（*constituent negation*）に二分されている（五十嵐 2020:5, 10）。文否定の最も代表的なものは標準的否定（*standard negation*）であるが、例えば禁止表現も文否定の一種である。下記、それぞれの文否定の種類について述べていく。

2.1 標準的否定と文否定

標準的否定は言語の最も一般的な動詞的述語の含む陳述的主節を否定することを指している（Miestamo 2004: 364; 2022: 925; 高橋 2016: 75）。類型論的先行研究では3つの異なる否定を表す要素の種類が確認されている：接辞、助詞、そして動詞である（Miestamo 2022: 925）。また、標準的否定は種類が2つあるとされており、対称的（*symmetric*）及び非対称的（*asymmetric*）に分けられている。対称的な標準的否定は、肯定文と否定文は否定要素の有無のみで異なる（Miestamo 2004: 365; 2005: 61; 2022: 925）。一方、非対称的な標準的否定はさらに4つの種類に分類されている：主動詞の定性に影響を及ぼす否定（*A/Fin*）、存在性の表示に関わる否定（*A/NonReal*）、強調表示の否定（*A/Emph*）そして様々な文法カテゴリーの表示に関する否定（*A/Cat*）（同）。²

対称的な標準的否定として典型的なのは例えばドイツ語の否定である：*Johann singt / Johann singt nicht*（ヨハンが歌う / 歌わない）。つまり、否定辞以外に、文は構造的に異なっていないわけである。非対称的な標準的否定について一つ例をあげると、例えばフィンランド語の場合は *A/Fin* の下位範疇の *NegVerb*（否定動詞）である³（Miestamo 2004: 371）。

Miestamo（2005）によればアイヌ語における標準的否定は対称的であるという。文否定をアイヌ語で作る際は、一般的に *somo* という否定副詞を用いる。動詞句の直前位置に置かれると、*somo*

1 本来ウラル語族の諸言語の否定表現をまとめるためのガイドラインだったが、他の言語にも利用できる。Miestamo（2016）は指摘している。

2 それぞれの非対称的な標準的否定の種類のさらなる下位範疇はMiestamo（2004, 2005）を参考。

3 *nuku-n / e-n nuku*「私が寝る / 寝ない」のように、主動詞は定性を失い、否定動詞*e*が人称接辞をとることになる。ただし、フィンランド語の場合は否定動詞は時制や法（モダリティ）などをとることができない。

はその句を否定する (Tamura 2000 : 94)。

- (1) a. *somo ku-ku kusune*
NEG 1SG -drink going.to
'I won't drink (it)'

- b. *tapan pe seta somo ne*
this thing dog NEG COP
'This is not a dog'

- c. *somo neno ku-yaynu*
NEG like 1SG -think
'I don't think so'

(Tamura 2000 : 94–95) ⁴

上記で示したのは最も一般的な述語を否定する方法であり、肯定の場合はただ *somo* を抜いたままである。しかし、*somo* + 動詞句 (VP) 以外にはほかの文否定を作る手段もある。例えば「*somo ki* (NEG + する)」という構造があるが、これを「しない」を意味する一つの機能的なまとまりとしても扱う説もあり、分析的な型式であるという説もある (佐藤 2008, 高橋 2016)。後者は、*somo* は形式的に *ki* を否定するのだが、*somo* の前に現れる動詞を名詞句として扱い、*ki* の目的語と捉えられていると意味する (Bugueva 2012 : 496)。また、例えば Honda (1996 : 21–23) によればこの *ki* は非対称的な標準的否定の一種に相当する (つまり Miestamo (2005) の述語の定性の変化を行う *A/Fin/Neg/FE* という範疇) という。しかし、*ki* は強調的な肯定文でもみられるので、*ki* を伴う否定は対称的な標準的否定の構造で成立させる強調的な構造であると考えられるのも可能なのではないか。

さらに、*somo ki* の前に *ka* という限定詞のような助詞を付けることが多い。例えば、佐藤 (2008) では動詞の後に「*ka somo ki*」という要素を置くという構造が紹介されている。

- (2) *na epuyke hecirasa ka somo ki*
yet flower bloom even NEG do
'まだ花が咲かない'

(佐藤 2008 : 17, 22)

4 本研究では The Leipzig Glossing Rules を参考にし、グロス (注解) を全論文に一致するようにしているため、他の研究者による用例のグロスもやや変更しているところがある。

この *ka somo ki* はどのように捉えるべきなのかは研究者によって異なる説明がある。一つは、強調的な否定の表し方といい、*ka* を付加することによって、*somo* の前に現れる名詞句を焦点にすることができる場合もあり (Bugaeva 2012 : 496)、意外や想像されていないことのニュアンスもある場合があるとされている (Tamura 2000 : 239)。また、例えば千歳方言における「*ka somo ki*」は決まり文句のような否定の表し方であるという説もある (佐藤 2008)。さらに、例えば千島列島・カムチャツカ方言の研究を行った Akulov (2017) によれば、「*ka somo ki*」は「単純に日本語の否定構造を真似しており、本来アイヌ語に現れない構造である」と主張しているが、北海道諸方言の中で実際に使用されている構造であるため、本来アイヌ語にある場合もない場合も、否定表現を豊かにするのではないかと思える。

アイヌ語の標準的否定を形態論的にみれば、非対称的な傾向もあると指摘されている (例えば高橋 2016)。Miestamo (2005 : 109) によれば否定と相関関係にある強調は、同じ肯定文の場合に現れない構造を A/Emph といい、最も一般的な成立仕組みは、強調辞が否定要素に付加されることである。しかし、A/Emph の際の強調辞は、文に強調の意味を加えず、意味的に強調的な否定ではないわけである。したがって、例えばアイヌ語千歳方言の場合は、「*ka*」は否定文に強調の意味を入れないとされているため、「*ka somo ki*」は標準的否定からみると非対称的な標準的否定の A/Emph と呼べる可能性もある。一方、*ka* は肯定文にも現れることがあるので、*ka somo ki* もどちらかという対称的な標準否定として扱うこともできるかもしれない。しかし、例えば Bugaeva (2012) や Honda (1996) などによると、否定構造に *ka* を加えると強調を表すことができる。よって、強調の意味を加えない A/Emph と定義できなくなる。このように北海道南部、特に沙流方言における「*ka somo ki*」は強調の意味が含まれているとされているわけである。本稿では、主に北海道沙流方言の研究資料を扱っているため、Bugaeva (2012) に従って *ka* が強調の意味を加えると捉えていく。

2.2 命令と他の非陳述の否定

命令の際は、標準的否定と異なった否定辞が使用されるのが最も一般的である (Miestamo 2022: 927)。しかし、標準的否定のように、否定的な命令 (つまり禁止) も対称的・非対称的のように区別できる (同)。つまり、標準的否定の作り方と同様に、否定的な命令は禁止を表す要素 (*prohibitive*) を動詞の直前という位置に置くことによって成立する。アイヌ語の場合は禁止表現を作る際は、*somo* ではなく *iteki* という要素が一般に使われる (Tamura 2000: 246)。

- (3) a. *iteki ye!*
 PROH say
 'Don't speak!'

(Tamura 2000 : 246)

b. *iteki wenno en-ramu wa en-kore yan*
 PROH be.bad.ADV 1SG.O-think CON 1SG.O-give IMP.PL/POL
 ‘Please don’t think poorly of me.’

c. *iyaykipteno iteki iki*
 be.dangerous.ADV PROH do
 ‘Don’t do anything dangerous (lit. Don’t do dangerously)’

(Tamura 2000 : 95)

iteki は対象となる動詞句の前に置かれ、人称接辞などを取らない。また、否定的陳述のように、命令も対称的であるといえ、例えば a. の肯定的命令の場合は「*ye*」となる。これは 3 人称と完全に同じ構造なので、命令か陳述かはコンテキストから解釈することが多い。b. の文末にみられる *yan* は丁寧性と複数を表す。つまり、複数の聞き手に対して命令する場合にも、単数だが敬意を表す際に用いられる。また、命令は複数の聞き手に向かって話されている際は、動詞の複数形が用いられることもある。ただし、全ての動詞には複数形が必ず存在しているわけではない。

他の否定的命令の一種としては、例えば *ikiya(n)* という禁止を表す副詞がある（佐藤 2008 : 129; 田村 1996: 224）。ただし、これが含む文は命令よりいわゆる「教諭表現」として使われるのが多いとのことである（佐藤 2008 : 129）。

(4) *ikiyan eci-omkekan na*
 REQ.NEG 2PL-catch.the.flu FIN
 ‘風邪を引くんでないよ’

(佐藤 2008 : 127)

ここで挙げた *iteki* と *ikiya(n)* は最も一般的な禁止の表し方である。平叙文の否定のように、述語の直前に置かれるのが一般的である。また、*somo* が用いられたことと同時にモダリティを表す要素が現れる禁止表現もある。例えば下の用例では、暗示的な命令として指示を *p(e) ne (na)* 構造で示されている。また、*p(e)* による名詞化節は義務的モダリティ (*deontic modality*) を示すのにも用いられる（高橋 2014: 150）。

- (5) *somo tonokouymam-an⁵ pe ne na eci-haweoka a*
 NEG go.trade-IND.A thing COP EMPH 2.PL-speak PAST
 ‘私たちは和人と交易しないんだぞとあなたたちが言っていた’

(田村 1986 : 16)

田村 (1986) の翻訳においては「～ないんだ(ぞ)」のようにされており、田村 (1996) では *pe ne* は「説明 / 教え / さとし」という際に使われるという。しかし、例えば Bugaeva (2013) や Tamura (2000) などによると、否定・禁止の際にも使われており、「否定+ *pe ne*」構造は語用論的に禁止として解釈できる。

2.3 従属節における否定

従属節においては、否定構造の種類がいくつかみられる。主節のように、*somo* もみられる。高橋 (2016: 75) では十勝方言が扱われているが、接続助詞 *no* はいわゆる状態的な事象 (*stative*) を示すとされており、肯定文にも否定文にも現れる。肯定文の場合は、状況的な事象を表す一方で、否定構造においては時間的な関係を示すという (同 75–76)。また、時間的な関係にあるいくつかの動詞句の際は、主節・従属節の関係にあるとされている。下記ではまず (7a) では接続詞 *wa* が用いられ、二つの動詞句を時間的な関係に結んでいる。

- (7) a. *ku-saware wa somo ku-hopuni*
 1SG-be.idle CON NEG 1SG-get.up
 ‘私は怠けて起き上がらなかった’
 b. *somo ipe somo wakka ku no an.*
 NEG eat NEG water drink CON.NEG exist
 ‘(彼女は) 食事もせずに、水も飲まずにいる’
 c. *pirkano yayetupare no ipe yan*
 be.good.ADV be.careful.of CON eat CMND.PL/POL
 ‘十分に気を付けて食事をしなさい’

(高橋 2016 : 74, 76)

5 査読者は、この *an* が人称接辞と思われると指摘しているが、田村 (1986: 16) では、「*somo tonokouymam an(-)*」のように間に空白があるように書かれている。また、同じ物語においてこの文の後に「*tonokouymam somo an pe ne na* (和人ととの交易には行かないんだよ)」という文も現れている (田村 1986: 18)。後者に関連して、Tamura (2000: 76–77) では、*an* が前に現れている動詞の代わりにその動詞の意味を伝達することができるという。例えば Tamura (2000: 77) では：

a-netopake tumasnu wa siyeye ka somo an pe ne na
 IND.A-body become.healthy CON become.ill even NEG IND.A thing COP EMPH
 ‘…(anyone’s) health will become robust, and (they) won’t even get sick.

このように、*siyeye* と *an* が分けられており、*an* は自動詞「いる、存在する」かのように見えるが、Tamura によるとこれは人称接辞であるという。そのため、*isam* とはならず、*somo an* のままである。

(7a) では *somo* は単数 1 人称接頭辞の *ku* が付いた主動詞の *hopuni* が作る動詞句を否定する。この場合は、否定の対象になっているのは明らかに否定要素の右に来るものであるといえる。なぜなら、動詞句を接続する要素の *wa* のためである。*wa* は接続詞の一種で、直前に位置している述語を後ろに置かれている述語と繋ぐ役割を果たしている。この後に来る *somo* は *wa* の前の文をスコープにとることができない。また、(7b) では *no* が用いられ、二つの動詞 (*ku* と *an*) の間に現れている。この際は「食べる」と「飲む」という行為が行われずに事象が済んだことを示している。(7c) は肯定文であり、*no* が状態的な出来事を表し、動詞を含めた副詞句を作るという (高橋 2016: 76; Takahashi 2022: 620)。

3. 非文否定

ここで扱う非文否定 (*nnon-sentential negation*) というのは、文否定以外の否定の表し方を示す。つまり、標準的否定と否定的な命令構造ではなく、例えば内的に否定の意味が入っている動詞などがこのカテゴリーに含まれる。

3.1 構成素否定

文否定は文全体を否定するが、構成素否定はそうでなく、文の一部のみが否定の対象となっている (Huddleston & Pullum 2002 : 789)。Miestamo (2022) では述語に付けられる否定的意味を持つ格表示や活用や接置詞などを非文否定の一種とされており、反対 (*opposition*) や欠場 (*absence*) を示すのが主である。例えば英語は否定的前置詞が多く (*un-, in-, dis-, a-, anti-, de-, counter-* など)、後置詞 (例えば *-less*) も多少みられる。

アイヌ語における構成素否定といえば、例えば高橋 (2016) は形態的手法及び統語的手法に大きく二分している。高橋 (2016) が挙げる形態的手法とは、他の形態素に接尾辞を付加することである。例えば「*-ko*」という否定的接尾辞を自動詞に付加すると、その自動詞を反語的な意味の副詞に変更できる (高橋 2016 : 73)。

- (10) a. *hanke-ko e-oman tek e-san ru he?*
 be.near-NEG 2.SG-go CON 2.SG-go.down NMLZ Q
 ‘あなたは遠いところまで行って下ってきてのか’
- b. *toon reyep sitakkane-ko en-kasuy wa iramante*
 that dog be.a.short.period.of.time-NEG 1.SG.O-help CON hunt
 a korkay tane anak sini ehanke kotom an.
 PAST but now TOP rest be.near CON exist
 ‘あの犬は長い間私を手伝って狩猟したが、今は死ぬのが近いようだ’

(高橋 2016 : 73)

ここでは、アイヌ語の場合の極性のある疑問、いわゆる諸否疑問 (*yes or no question*) に対してどのように否定的に返事するのかということを扱う。また、それぞれの否定的返事の意味は何か、すなわち、何を否定しているのかについても考察する。なお、アイヌ語の疑問文はたいてい、文末でアクセントが上がる傾向がみられる (Tamura 2000: 232)。そのため、疑問辞を必ず用いる必要があるわけでない。Tamura (2000: 39) では、否定的な返事について次のような例が挙げられている:

- (Tamura 2000 : 239)

また、諸否認疑問文に対して、「はい」あるいは「いいえ」のように返事する際は例えば Tamura (2000) によれば次のようなのが可能である。まず、肯定の場合に、*un* を様々な証拠性を表す *ruwe*, *hawē*, *siri*, *humi*⁸ の後に置く。

8 一般にいうと*ruwe*は話し手の確かな情報、*hawe*は伝言、*siri*は目で見た情報、*humil*は目以外の感覚で伝わった情報を表す (Tamura 2000, Bugaeva 2013など)。

- (12) A: *numan huci ek ruwe?*
 yesterday grandmother come NMLZ
 ‘Did grandmother come yesterday?’
 B: *ruwe un*
 NMLZ FIN
 ‘Yes, she did.’

(Tamura 2000 : 239)

(12) から分かるように、A の命題「*numan huci ek*」に対して、B がその命題が正しいと思い「*ruwe un*」と答える。一方、否定の場合は、話し手が自分の推量を確かめる際に、*ruwe, hawe, siri* の後に *somo ne (ya)* を付けることがある (Tamura 2000 : 246)。また、直接聞く際は「VP + *ya*」のように疑問辞を最後に置く。

- (13) a. *e-sinki ruwe somo ne?*
 2.SG-be.tired NMLZ NEG COP
 ‘You’ re tired, aren’ t you?’

(Tamura 2000 : 246)

- b. *e-sinki ya?*
 2.SG-be.tired Q
 ‘Are you tired?’
somo
 NEG
 ‘No.’ (*somo ku-sinki wa* is also possible)
 c. *somo e-sinki ya?*
 NEG 2.SG-be.tired Q
 ‘Aren’ t you tired?’
somo
 NEG
 ‘No.’ (*somo ku-sinki wa* is also possible)

(Tamura 2000 : 240)

(13a) では、話し手は相手に対して「疲れている」と思い、それを確かめるために *ruwe somo ne* を用いていると考えられる。すなわち、 $[_{vp}[_{np}[_{vp} \text{ e-sinki } ruwe] \text{ somo } ne?]$ のような階層を成している。つまり、*e-sinki* ではなくコピュラの *ne* は否定され、厳密に「『あなたが疲れた』という事実ではない?」と意味する。さらに、(13a) と同じような推量の確認を行うために (13bc) のような構造で

も質問できるという (Tamura 2000: 246)。(13bc) で示したように、アイヌ語は *somo* のみで、問投詞にも似たように質問に対して回答することができる。また、肯定的疑問に対しても、否定的疑問に対しても否定で回答することが可能である。Tamura (2000) の解決によれば、b. では肯定的疑問に対して [NEG] と回答され、つまり、疑問に出る命題 [*sinki*] に対して [NEG] というわけである。一方、c. では疑問文の中に否定は含まれており、[[*sinki*] NEG] に対して [NEG] と答えられているが、Tamura (2000: 240) によると c. の回答は「*somo ku-sinki wa*」という語用論的意味を持っている。言い換えると、疑問に出ている命題 [*not tired*] を否定しているのではなく、逆にそれと同意していると考えられる。また、*somo e-sinki ya* では前提となっているのは「疲れている」ことであると考えられ、話し手は相手の何かの苦労した姿をみたことなどで、「辛いことしたのに、疲れていない？」のように尋ねているのではないか。

まだ問題として残っているのは、*somo* のみで [[*sinki*] NEG] に対して [NEG] という解釈は可能なのかということである。言い換えると、[*somo e-sinki ya*] の否定極性と不同意し、*somo* と答えることによって話しての間違った推測を訂正し、「実は私が疲れている」という意味を伝達できるのか。理論上で、例えば ⁹*ene somo ne no, ku-sinki wa*¹⁰ *ene ruwe somo ne no, ku-sinki wa* という回答で「(そういう⁹)ではなく、疲れたよ」というような意味を伝達できるのではないかと思われるが、こういう用例を探すのは今後の課題となる。文脈によって、c. における *somo* は [[*sinki*] NEG] という命題を否定できれば、*somo* は語用論的に非常に生産的であることになる。¹⁰

一方、存在について尋ねられる際に、命題を否認する場合は否定動詞を使うのが一般的であるようだ。

- (14) A: *e-saha an ruwe?*
 2.SG-older.sister exist NMLZ
 ‘Do you have an older sister?’
 B: *isam*
 exist.NEG
 ‘(No, I) don’t.’

(Tamura 2000: 240)

(14) でみられるように、A は B が姉妹がいるという前提を持ち、確認するために尋ねると、B はこの命題は偽であることを伝えるために否定で回答する。すなわち、非存在を示す自動詞「*isam*」が用いられる。*isam* が用いられると、姉の存在が否定され、「いない」という解釈になる。例えば [³**ku-saha an ruwe ne ka somo ki*] などとはならないが、「姉がいる」という命題を否定するのに、*ku-*

9 前のコンテキストで対話相手が述べたことを示す。

10 あるいは、単に「*ku-sinki wa* (1SG.A-be.tired FIN)」のように肯定文で答えられるかもしれない。

*saha an ruwe ka somo ne*¹¹ というのは可能性が高いといえる。さて、「*isam*」と「動詞句 + *ruwe ka somo ne*」どのように異なっているのかはまだ疑問が残っている。この場合の *isam* は、*saha* に対して非存在を示すが、*ruwe ka somo ne* は厳密にいうと「存在する」という事実を否定している。という、*ruwe ka somo ne*¹² は対話相手の命題を否定するとはいえると思うが、*isam* は具体的に何を否定するのであろうか。「姉がいる」という前提を否定しているかどうかについてはさらに研究する必要がある。

4. 他の否定の現象

4.1 接続表現

アイヌ語には動詞句と動詞句を繋げるアスペクトと関連している接続助詞がある。典型的なのは例えば *wa* 及び *no* であり、*wa* は二つの動作の継続的に時間的な関係を示し、*no* は肯定文の場合は状態を示し、否定文の際はその動作が行われずに済むという意味を表す (Tamura 2000: 148–149, 169)。佐藤 (2007) ではアイヌ語千歳方言の完了アスペクト「*wa an*」に関して、否定構造での用法について「結果が知覚不可能な完了」、「結果が知覚可能な完了」、そして「動作継続の否定形式」を表すという。¹³ また、高橋 (2016) は、これは従属節における標準的否定の非対称性を示しており、アスペクトに関連するものとみることができるとのことであるが、アスペクトという、時間的關係および行動ではなく、状態としてとらえられているという (高橋 2016: 76)。要するに *no* が「～なしで、～せずに」のような意味をする場合もあり、完了のアスペクト以外に動作継続¹⁴を示すためにも用いることができるようである。

- (15) *na ku-ipe ka somo ki no k-an*
yet 1.SG-eat even NEG do CON.NEG 1.SG-exist
‘私はまだ食べていない’

(佐藤 2007: 10)

11 例えば査読者が指摘してくださったように、アイヌ語静内方言では次のような用例がある：

rayoci ne an ruwe ka somo ne
rainbow to/into/exist/become NMLZ even NEG COP

「虹になったのではない。」(C0057L00608; 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ)

このような構造では、*ruwe* という名詞化を行う要素はコピュラ *ne* と同時に現れ、「～事実である」のような意味を成している。また、*somo* を付加することによって「～事実ではない」となり、「というわけではない」のような意味合いを成立する。この例に関しては、指摘した査読者に感謝する。

12 田村 (1996: 71) では *ruwe*, *hawu*, *humi*, *siri* のような名詞化辞・形式名詞を否定する場合は、上記で述べた名詞化辞 + (ka) *somo ne* 以外には名詞化辞 + (ka) *isam* という構造もある。しかし、この場合は *ruwe* などは形式名詞よりも、具体的な意味 (跡、声、感じ) を持つ要素として捉えてもよいかもしれない。つまり、「音」、「声」、「感じ」などが無いような意味として解釈できる場合もある。

13 つまり、「結果が知覚不可能な完了」は事象が過去に成立していて、その影響が発話時点において残っていると発話者が判断しても、その結果が知覚可能な形で表示できない場合を示す (佐藤 2007: 4)。また、アイヌ語 (千歳方言) の場合は結果が知覚可能な場合も不可能な場合も同じ形で示されている (同 10)。

14 例えば *tane anak nep ka ku-kar ka somo ki no k-an* 「今は何も私は作っていない。」(佐藤 2007: 10)。

ここでは *ku-ipe* という行動が否定的に完了している。なお、例えば日本語の「テイナイ」よりも、否定は *an* の前に来るので「ナイデイル」のようになっている（佐藤 2007: 10）。つまり、*no* の後に来る *k-an* は否定の対象になっていないことが明らかになる。厳密にいうと、*ka sono ki* 構造なので、*somo* が否定するのは *ki* であるため、「まだ私が食事することをしていない」のような発想だといえそうなのではないか。

上記の接続表現と共に現れる際は、*somo* は単独で現れることもでき、つまり述語（動詞）が省略されている構造を成している。その省略されていた内容は前のコンテキストから解釈でき、*somo* がコンテキストによって可能な語用論的な意味を多く持っているともいえる。（17）においては戦争の時に外国からやってくる者は何のために来ているのかについて語られている。

- (17) *repunkur or wa, arki hike, arki corawki wa arki hike arki,*
 foreigner place ABL come.PL one.of come.PL be.angry CON come.PL one.of come.PL
somo hike sono no, sinot kusu arki hike arki hi nani
 NEG one.of NEG CON.NEG play reason come.PL CON come.PL NMLZ soon
sisam mosir ta, osirok hike osirok wa...
 Japanese land LOC get.stuck.along.way one.of get.stuck.along.way CON

‘外国人の所から来るものは来、攻めて来るものは攻めて来て、そうではないものはそうではなく、遊びに来るものは遊びに来て、すぐに、日本にひっかかるものはひっかって…’

（田村 1986: 40）¹⁵

ここでも動詞句が省略されているので *somo hike* は語用論的に「そうではないほう / もの」つまり「攻めてこないほう / もの」を意味している。*hike* はいくつかの意味があるが、ここで見られるのは「～方、～もの」という形式名詞¹⁶だと考えられる。つまり、*hike* は主語のように振舞っているように捉えられる。また、否定は一般に状態を表すとされているが（例えば Givón 2018: 103）、ここで現れる *somo no* は状態を表すか動作継続を表すかは複雑であるが、田村（1986）によると *somo no* は「そうではなく」つまり「（攻めて）来ずに / （攻めて）来る代わりに」というように語用論的に解釈できる。

15 全ての『アイヌ語音声資料』（田村 1984-89）の用例におけるグロスには著者によるものである一方、日本語訳はそのままである。*hike*は他に、*wa*に似たような接続詞として捉える場合もある。

16 田村（1996）のアイヌ語沙流方言辞典では「被修飾名」とされており、「もの、ほう（二つ/二人以上のうちのひとつ/一人）」という意味をする。

4.2 否定のスコープと焦点

4.2.1 スコープ

Huddleston & Pullum (2002) では否定のスコープと焦点についてこう述べられている：「*The scope of negation is the part of the meaning that is negated. The focus is that part of the scope that is most prominently or explicitly negated.*」(Huddleston & Pullum 2002 : 790)。つまり、スコープはその文の否定されている意味の部分であり、焦点がスコープの最も明示的に否定されている部分であるという。また、例えば沼田 (2000 : 130) によるとスコープは「可能な範囲」であり、焦点は「実際の対象」というように捉えられている。これらの二つの定義は少しことになっており、Huddleston & Pullum (2002) によるスコープはただ「否定されている部分」ということに対して、沼田 (2000) によるものは否定の可能な範囲である。焦点はどちらも同様な扱いといえる。沼田 (2000) ではスコープと焦点について次の用例で説明されている：

太郎は大学の先生ではない。新聞記者だ。

太郎は大学の先生ではない。高校の先生だ。

(沼田 2000:130)

上記の否定の対象となっているもの、つまり焦点が下線で示されている。a. では、太郎という主語 / 話題の職業が[大学の先生]ではなくて[新聞記者]であるとされ、否定のスコープも焦点も[大学の先生]にある。また、b. では太郎は高校の先生なので、否定のスコープは[大学の先生]であるが、焦点は[大学]にある。しかし、主語の方はどうであろう。沼田 (2000 : 136) によると日本語の場合は主語が否定のスコープに入らない。一方、例えば Kishimoto (2018) によると主語も目的語も否定のスコープに入っている場合もある。

このように、日本語や英語などに関する研究は盛んであるが、アイヌ語は否定のスコープに何が含まれるのか、焦点はどのように表すのかについてはまだ不明な点が残っている。接続表現の考察においてはすでに *no* を扱っていたが、否定のスコープにも関係がある。例えば岸本 (2017, 2019) はアイヌ語の複雑述語 (*complex predicate*) の研究の中で否定文にも触れており、否定副詞 *somo* を VP の前に置くと、接続助詞の *wa* の代わりに *no* が用いられ、「*somo VP no an*」になる (岸本 2019 : 63)。例えば「*somo ikesuy-an no an-an a*」(NEG run.away-IND.A CON exist-IND.A PAST) の中で、*somo* のスコープに入っているのは *ikesuy* (‘家出する’) のみと捉えることができるという。(同 63–64.)¹⁷ つまり、*no* の前に位置している否定は完了の際でも動作継続の際でも、スコープを広

17 佐藤 (2007 : 11) では、例えば日本語と対照すると、日本語の否定形の「テイナイ」は「イル」を否定した形式をとるに対して、アイヌ語の「*ka somo ki no an*」は「ナイデイル」となっている。つまり否定が「イル」の前に来る。要するに、岸本 (2019) は、「VP *wa an*」の *an* を否定する際に、否定動詞 *isam* 使い、「VP *wa isam*」を作ってしまうと「対象の損壊・消滅」を意味する既存の補助動詞構文と形式が重複することになると主張している。「VP *wa isam*」を同時に完了の否定を表わす形式として用いることができないため、アイヌ語では「テイナイ」型の否定にならないという (岸本 2019 : 64)。

げることができないということになる。即ち、例えば完了だと、(16) の「*na ku-ipe ka somo ki no k-an*」は、過去の時点から発話時点まで「*ipe*」という動作が行われていないまま動作主はいる (*k-an*)。これを [[*[ku-ipe] ka somo ki*] *no k-an*] のような表すと、*ipe* が *ka somo ki* で否定され、*no* は前に文を次の文と関係付けるが、「動作が行われていないままにいる」のような認知上の意味になっていると考えられる。次の用例も同じような使い方が見られている。

- (18) *a-uni ta ahun-an akusu tan pe or ta a-kor*
 IND.A-house LOC enter-IND.S and.then this thing place LOC IND.A-possess
nispa somo ekimne no an
 rich.man NEG go.to.the.mountains CON.NEG exist
 ‘家に入りますと、この時に、私の主人は山へ行かずに、家にいました。’

(田村 1985 : 44)

(18) でも、どちらかという状態が表されており、*somo ekimne no an* となっている。*somo* が *ekimne* を否定し、*no an* は前述の動作が「行わなかったままにいる」ということを表している。このように否定のスコープは接続助詞 *no* を超えないといえる。しかし、否定の場合は「V1 *wa* V2/*an*」という構造が可能な場合があり、例えば岸本 (2017) で指摘されているように、非常に稀だが、「V *wa inkar*」という構造は否定の時にみられる。「*wa inkar*」はその前の動詞が表す動作を「してみる」という意味を持っている。

- (19) *sirkap a-rayke yak a-ye wa ku-sisakpekaopas,*
 squalidae IND.A-kill FCND IND.A-say CON 1.SG-go.help.with.something
somo eani hem e-san wa e-inkar?
 NEG you also 2.SG-go CON 2.SG-look
 ‘ツノザメがとれたと言うので私は珍しいものだから言って手伝うよ、あんたも行ってみない?’

(田村 1996 : 662 [岸本 2017 : 58 より])

ここでは、接続助詞は *no* ではなく *wa* が用いられているため、*somo* のスコープは V1 の *e-san* のみならず、「*e-san wa e-inkar*」という複雑述語の全体に広がっているという (岸本 2017 : 59)。こうするのは、岸本 (2017) によると「*e-san wa e-inkar*」の動詞は内核接続であるといい、つまり節の内核のレベルで統語的にリンクしていることを表し、*somo* のスコープは両要素に広がるができるということである。逆に、例えば (16) では否定のスコープが *wa* を超えないのは、その二つの動詞は (19) のように語用論的に一つの意味塊になっていないためであると考えられる。しかし、否定のスコープには「*inkar*」も入っているというのは、特殊な例として扱うべきかもしれない。ほかの似たような複雑述語も同じ扱いになるのかは用例を見つけること次第である。

4. 2. 2 焦点

Huddleston & Pullum (2002) では、焦点 (*focus*) を情報的焦点 (*informational focus*) とされ、つまり文の最も重要とされている情報が焦点となっている。例えば英語では、ストレスやプロソディー (強調と韻律) を通して文の中の焦点となる部分を表すことがある。Givón (2001) では英語の否定における焦点を対比的焦点 (*contrastive focus*) として扱われ、音声的な強調 (*stress*) を用いることによって伝えられている (Givón 2001 : 380)。また、太田 (1980 : 588) でも、文強勢を与えられた項目は焦点となり、つまり英語の場合音声的に他の部分より強く、高くそして長く発音されるものは焦点となる傾向がある。

さらに、焦点は Huddleston & Pullum (2002) によると「*The focus is that part of the scope that is most prominently or explicitly negated.*」といい、文の最も明確に否定されている部分である。なので、アイヌ語も否定文の際、例えば音声的に強調によって示されている可能性がある。また、言語によって例えば語順で焦点を表す場合もある。アイヌ語もどのような傾向があるのでしょうか。アイヌ語は一般に SOV という語順を従っているが、否定辞と他の要素の位置の関係性について総合的に考察したものはこれまで確認できていない。しかし、例えば述語は人称接辞をとるので、代名詞は多くの場合省略されており、逆に代名詞も明示的に表れていると焦点はそれに当たるという可能性がある。なお、3人称の場合は述語にいわゆるゼロ形態素で示されている。Tamura (2000) ではこの二つの文は意味が異ならないとのことである。しかし、語順を変えることによって焦点を変えることができるという言語もある。アイヌ語も否定の文中での位置、つまり語順は文の意味にも影響を与える可能性はあるかについて考察したい。

- (20) a. *ku-yupo* *somo cep koyki*
 1.SG-older.brother NEG fish catch
 b. *ku-yupo* *cep somo koyki*
 1.SG-older.brother fish NEG catch
 'My older brother did not catch fish'

(Tamura 2000 : 28)

(20) においては、*somo* は a. では目的語になる *cep* の前、b. では目的語と主動詞の *koyki* の間に位置している。Tamura (2000 : 28) では「*cep koyki*」は二つの語になっているが、「*cepkoyki*」という自動詞もある。そのため、a. では「*cep koyki*」を自動詞のように解釈すれば、「S + *somo* + V^I」という順番になるので、*somo* は動詞句の直前に現れている。他動詞の解釈の場合は、「S + *somo* + Obj + V^I」のような語順になる。

しかし、*koyki* を他動詞として扱うと、文の意味解釈は異なるのであろうか。つまり、*somo* の焦点になるのは *cep* だとすると、a. の方は *cep* ではなく、何か他のものを取ったという意味としても

解釈はできるのであろうか。また、b. では、*cep* は動作の対象になっているが、「とる」のではなく、「見る」など他の動作が起こったのであろうか。つまり、a. であると例えば「魚ではなく、イカを取ったよ」そして b. では「(魚を) とったのではなく、見たよ」というように、a. では否定の焦点は目的語にあり、b. では主動詞にあるという仮説である。これに関して、例えば Givón (2001) では英語における主語・目的語・動詞などそれぞれの焦点について述べられている。この分析では Givón (2001) を参考にする。

まず、目的語が否定辞および動詞の前に来る O-Neg-V 語順の用例をみてみよう。

- (21) *taan kina somo a-e p ne*
 this grass NEG IND.A-eat thing COP
 'This is not a grass to eat'

(Tamura 2000 : 244) ¹⁸

実は (21) では *p(e) ne* という、前に置かれているものを名詞化する形式名詞 *p(e)* 及びコピュラ *ne* が成立する構造が用いられている。その前に見られるのは従属として捉えられる。即ち、この文の構造をみると *[vp[np[vp taan kina somo a-e]p]ne]* というように分析できる。つまり、従属節は「*cep somo koyki*」と同じ語順である。主語が他動詞の場合に *a-* で示される不定人称であり、「*taan kina* は食べられないが、他の動作ができる」、「食べる」ではなく「有毒だから避ける」などという解釈は可能であると考えられる。これは Givón (2001 : 381) で紹介される目的語焦点 (*object focus*) に相当する可能性がある。¹⁹ また、*p(e) ne* 構造が語用論的に (否定的) 命令として捉えることもできる (例えば Bugaeva 2013)。次の用例にも同じ語順がみられる。

- (22) *eci-eniwcinne hene ki wa ne yakun, kanna a-eci-ipere*
 2.PL-drive.out or do CON COP if again IND.A-2.PL.O-feed
yakka, somo yak anakne, rika somo a-eci-ere
 even.if NEG FCND TOP fatty.meat NEG IND.A-2.PL.O-feed
kus ne, sekor kotan-kor-nispa ka wentarap
 reason COP QUOT village.hetman also dream.of

「[貧乏人夫婦を] 追い出しでもして、そうしたら、またお前たちに食べさせるが、そうで

18 Tamura (2000 : 244) では、*a-e p* は動詞の後に名詞が来るというように扱われているが、*aep* という「食べ物」を意味する名詞も存在している。一つの名詞「*aep*」として捉えたと、ただのコピュラ句になり、「人が食べない草」となり、義務的モダリティのニュアンスがなくなる。また、その場合 *taan kina* はおそらく目的語ではなく主語になるであろう。また、*aep* を名詞として捉えたと、*taan kina aep somo ne* という語順がより一般的なのであろう。

19 Givón (2001 : 381) では「John didn't kill the goat」の目的語「goat」が否定の焦点になると、「[John] killed something, but not the goat」と意味する。つまり、動作主が行った動作の対象がその目的語ではないわけである。

なければ、脂肉を食べさせないぞと村長が夢を見[ました]

(田村 1989 : 60)

(22) では2行目に現れる否定 *somo yak* は、何を否定しているのかは理解にくいかもしれない。上記でも述べたが、*somo* が単独で現れるのは、語用論的にその前のコンテキストを否定する場合がある。つまり、蛇足を控えるために主動詞が省略されていると考えられる。さて、「*somo eci-eniwcinne yak*」なのか「*somo a-eci-ipere yak*」なのかということに関しては、田村 (1989) の解釈では「*somo eci-eniwcinne yak*」に相当するという。すなわち、「貧乏人夫婦を追い出しでもすれば、またお前たちに(肉を)食べさせるが、夫婦を追い出さなければ、肉を食べさせないぞ」ということを指しているのであろう。²⁰

このような条件性あるいは仮定性を示す肯定・否定文の際、文脈によって *somo* は理論的にのみならず、実際に無制限の可能な解釈がある。しかし、(22) のように *somo* および *yak* のみの節は、焦点が何なのかはさらなる研究が必要である。次に、2行目における二つ目の否定文では、Obj-Neg-V という語順がみられ、*rika somo a-eci-ere* という動詞句では否定副詞 *somo* が動詞 *a-eci-ere* を否定している。(21) のように、目的語が否定辞の前に現れるので、*rika* に対して「食べさせる」という行為が否定されているので、他の行為が可能なのではないか。実はこの否定文の後に *kus(u)ne* というモダリティ構造が用いられているので、話し手の意志や理由などを示し、前のコンテキストの「*somo yak...*」という条件と関連しているといえる。次の用例は (22) と異なり、Neg-Obj-V という語順が見られる。

(23) “*hokure ahun ahun.*” *sekor kane*²¹ *i-ye hine, ahun-an ruwe ne*

INTRJ go.in go.in QUOT EMPH 1.SG.O-say CON go.in-IND.S NMLZ COP

akusu, orano somo nep ye no an ayne

and.then from.then NEG what say CON.NEG exist finally

‘さあ、入りなさい、入りなさい’ と [彼が] 言います。私が入りますと、それから彼はしばらくにも言わないでいてから (--)。’

(田村 1986 : 10)

(23) では *nep ye* が動詞句を作り、*somo* はこの前に置かれている。*ye* は目的語も取る他動詞であり、目的語は *nep* となっている。一つ可能な解釈は、*somo nep ye* はいわゆるニュートラルな否定文を示すというものである。他動詞および目的語として扱えば、否定辞と主動詞の間に目的語が現れて

20 例えば英語などでも「*If you do X, then I will do Y, but if you don't (do X), I will not (do Y)*」のような言い方が可能である。

21 田村 (1996:274) では *sekor kane* は「というふうに(言った)」と意味し、*sekor* だけよりもちょっとした強めのニュアンスが加わるのである。

いるため、*somo* の焦点になっているのではないか。つまり、「何」が焦点されると、「言う」という動作は成り立たず、「黙っていた」という意味も伝達される。次の用例と比べると、*ye* ではなく *sunke* 「嘘をつく」と意味する動詞の際は *nep* は否定辞の前に置かれている。

- (24) *tane anakne teeta ekas, nep somo sunke ne kus,*
 now TOP long ago old.man what NEG lie COP reason
sisam mosir ta paye wa
 Japanese land LOC go.PL CON

‘今は、昔のおじいさんは何も嘘を言ったのではないから、和人の島に行って…’

(田村 1986 : 48)

(23) と異なっているのは、*nep* の位置である。*sunke* は本来「嘘をつく」と意味する自動詞なので、つまり目的語を持たない動詞であるため、*nep* はは何かというと、おそらくいわゆる任意的構成素 (*optional constituent*) として解釈できる。Givón (2001 : 381) では、こういう要素が加えられると、それがたいてい焦点となるという。つまり、*ekas* が言ったことが一つも嘘ではなかったわけである。また、田村 (1986) による解釈では、分裂文 (*cleft*) に似たように目的語が情報的な焦点とされているとも考えられる。言い換えると、この場合は、分裂のような現象が発生し、目的語が特に動詞が表す動作の対象にならず、何か他のものが考えられるという解釈である (Givón 2001: 386)。例えば (23) はいわゆる一般の動詞句に見られる否定、動作がそのまま否定されている可能性があり (Givón [2001 : 381] の言葉で *Neutral VP-negation*)、あるいは動詞が焦点とされるのである。そして、(21) や (22) などの場合は目的語が焦点とされ、動詞が示す動作の対象はそのものではなく、何か他のもの X であるという解釈である。Givón (2001 : 380) は英語の分析において、音声的強調と共に現れる際の語用論的意味を示している。アイヌ語もこのような強調が用いられるかは今度の調査課題としたい。

語順の観点からもう一度 (19) をみれば、否定文は否定副詞が文頭に挙げられ、主語がその後に来る：

- (19) *sirkap a-rayke yak a-ye wa ku-sisakpekaopas,*
 squalidae IND.A-kill FCND IND.A-say CON 1.SG-go.help.with.something
somo eani hem e-san wa e-inkar?
 NEG you also 2.SG-go CON 2.SG-look

‘ツノザメがとれたと言うので私は珍しいものだから言って手伝うよ、あんたも行ってみたいな?’

(田村 1996 : 662)

1 行目では話し手は自分のこれからの動作について伝達し、2 行で聞き手「*eani* (あなた)」を同じ動作に誘っているという。否定－主語－補語－複雑動詞という語順となっているが、アイヌ語は普段人称代名詞を省略することができる。つまり、特別な時に用いられる傾向がみられるので、このように明示的に使われることも、岸本 (2017) では (19) の解釈については、否定のスコープのみが扱われており、*eani hem* については論じられていないが、*eani* は情報の焦点であることの根拠の一つになっていると思える。なお、(19) は疑問文であるため、主語焦点 (*subject focus*) にならないようである (つまり、「行ってみるのはあなたではなく」のわけではない)。また、この否定的疑問文は「招待」という語用上の機能を持っており、他の可能な聞き手の中から対比的に区別するために用いられていると考えられる。

(25) と比べてみると、主語に相当する要素も *iteki* および動詞の間に現れることができる。

(25) *kusu iteki Penanpe ikoyosanpa*
reason PROH up.stream.guy imitate.someone
 ‘ですから、ペナンペ、人のまねするんでないよ！’

(田村 1986 : 20)

ここでは、「*Penanpe*」が人をまねした結果、酷い死に方をするので、語り手が *Penanpe* に人のまねをすることを禁止しようとしていると文字通り解釈できる。しかし、このような物語はたいてい言い伝えあるいは何かの教えを伝える役割も果たしているという (Endō 2022: 375)。文構造をみれば (19) と同様に、主語が否定辞の後に来るという語順であり、主語が自動詞 *ikoyosanpa* の直前に置かれている。すなわち、[[*ikoyosanpa*] PROH] は *Penanpe* に対して言われていることが分かり、*ikoyosanpa* という動作が禁止されているのは *Penanpe* である。このような語順になると、焦点も *Penanpe* になっているのであろうか。つまり、*ikoyosanpa* は *Penanpe* がしてはならないが、他の者はそうでないというように、文を読むと解釈できるかもしれない。一方、物語は語り手が聞き手に伝えようとするものであるため、*Penanpe* が忠告されるが、語られている当時は聞き手の全員も対象になっており、聞き手の全員も忠告されているというコンテキスト次第の語用論的解釈も可能なのではないか。

述語に対して要素の位置に戻ると、実は Tamura (2000 : 26) によると、自動詞の含む動詞句の語順は「主語・動詞」であり、他動詞の含む動詞句の基本語順は「主語・目的語・動詞」である。しかし、いわゆる古い情報が先に来、新しい情報や焦点となっている情報が述語の直前に置かれる場合もある (Tamura 2000 : 40)。

- (26) *ekasi huci nukar*
 grandfather grandmother see
 Grandfather saw grandmother'

(Tamura 2000 : 26)

- (27) *matkaci ikkasisam ekira*
 young.girl thief.Japanese abduct
 'The thief-Japanese took the girl and ran off'

(Tamura 2000 : 30)

(26) と (27) を比べると、主語と目的語の位置が逆になっていることが分かる。主語を太文字で示しており、(26) は一般的な語順を従う文である一方で、(27) では、*matkaci* がこの発言の前に話題になっていると考えられ、誰が *matkaci* を連れて去ったかという泥棒がその行為の動作主であり、それを焦点にするために他動詞 *ekira* の直前という位置に置かれているという。このように、焦点が動詞の直前という位置に置くことによって表せるのであれば、(25) でも *Penanpe* が焦点になっているといえる可能性がある。²² このように、一般的な他動詞否定文の語順は S-Neg-Obj-V のようである一方で、目的語を焦点にする際は S-Obj-Neg-V という傾向があるのではないか。

上記で述べた現象を、おそらく情報焦点として扱うことができると考えられる。似たように、禁止副詞の文中の位置とスコープ及び焦点との関係性に関する用例が見られる。

- (28)" *iteki uutari ka uwanun ka,*
 PROH same.tribe also mutual.strangers also
uwehosi-uwehosi yaynu no,
 mutually.different-mutually.different think CON.NEG
sine ikinne yaynu, sine irenka kor yakne ewesermakkor pe ne na"
 one alike think one thought possess FCND combine.efforts thing COP FIN
sekor an pe kusu
 QUOT exist thing reason
 '「親戚どうしても他人どうしても、テンデンバラバラなことを考えないで、一緒に考え、ひとつの意志をもつならば、それによってお互いに力になり合うものだよ」と言っていたので...'

(田村 1987 : 34)

22 この物語では、*Pananpe* が豊富になり、それを *Pananpe* がうらやましく思い、*Pananpe* と同じやり方でお金持ちになろうとしているが、結局酷い方法で死ぬので、語り手の *Pananpe* への忠告のようなもの、あるいは物語の結末へのコメントのようなものである。

iteki が文頭に置かれ、田村（1987）によると *yaynu* に対して禁止を示しているという。（25）のように主語（*uutari*, *uwanun*）がこれと主動詞 *yaynu* の間に置かれている。下記で紹介する *somo ... ramu/yaynu* の例のように、ここでも禁止副詞 *iteki* が動詞 *yaynu* との間に他の要素があるにもかかわらず、その動詞を否定化しているとされている。つまり、[禁止副詞 + 名詞 + 名詞 + 副詞 + 自動詞] という語順であり、*uutari* および *uwanun* は主語として捉えることができ、*yaynu* の動作主である。これを例えば（29）と比べると、主語の位置が異なっている：

- (29) *nenō a-utarihi ka iteki umonpok ta uhayta no,*
 like IND.A-comrades even PROH mutually.below LOC be.discrimination CON.NEG
yaynu, payoka ne yakka iteki ki sekor sinrit itak
 think come.and.go.PL COP even.if PROH do QUOT ancestor speak
ekasi itak an wa kusu, tapan sinot hararki sekor a-ye.
 old.man speak exist CON reason this play dance QUOT IND.A-say
 ‘そのように私たちも仲間どうし上下のわけへだてをして考えないように、行き来するにも、
 そのような差別をしないようにという先祖の言葉、古老の言葉があるので、この遊びをハ
 ラルキと言います。’

（田村 1987：34）

（29）では主語 *a-utarihi* が禁止副詞の前に置かれており、この物語の主人公の話であり、この文の前には、主人公は鳥の神様の飛ぶ様子をまねする遊びをするというコンテキストで、既に旧情報でもあり、主語がここで焦点となっていないと考えられる。逆に（28）は、実は主人公の言葉ではなく、物語の脇役のおじいさんやおばあさんの言葉であり、主人公に対して話していると文脈である。「テンデンバラバラなことを考える」のが禁止されているのは、どのような人物のかという「親戚どうし」および「他人どうし」となり、つまりこの二つの主語が焦点となっていると考えられる。（29）の方は、主語ではなく、動詞句が焦点となっているのではないか。

次に、それほど珍しくないともいえる思考動詞の際に見られる否定構造について考察を行う。下の用例では、決まり文句のようにも捉えられている否定には、様々な未解決状態の問題点が残っている。

- (30) *hunak ta arpa-an kor, ironne nitay tum ta*
 where LOC go-IND.S and.then be.thick forest inside LOC

somo ka oro ta cise an kunak a-ramu a uske²³ un
 NEG even place LOC house exist QUOT IND.A-think PAST place DIR
 i-etoko un supuya at kor siran
 IND.O-in.front DIR smoke stand PROG circumstances

‘どこかに着きましたら、深い森の中に、まさかそこに家があると思わなかった所に、私の前の方に、煙が立ちのぼっていました’

(田村 1985: 8)

ここに現れる否定は、*ironne nitay tum ta somo ka oro ta cise an kunak a-ramu a uske* という文の中だが、田村 (1985) によれば否定は「*ramu*」に当たっているという。しかし、*somo* は述語の直前という位置に置くという規則に反して、*somo ka... ramu* という「まさか… 思わなかった」を意味するとされている決まり文句のようにも扱われている。しかし、動詞で終わる文の後に置かれる *kunak* は、その前の文を名詞化する役割を果たしているため、[[[VP] QUOT] think] のような構造を成しているといえる。すると、*somo* は *ramu* をという述語を否定するとはいいいにくくなるとおもえる。ここにおける *somo* は、つまり、主節ではなく従属節に活躍しているのではないか。しかしながら、こういう用例は主に *somo ka... ramu/yaynu* のような文脈で見られるので、慣用的な表現として捉えるべきかもしれない。田村 (1985) によると「まさか… 思わなかった」という意味となっているが、本来アイヌ語的な表現として「(あそこに) 家がないと思った (ら)」という解釈が可能かどうかは、多くの用例の分析が必要であると考えられる。²⁴

さらに語順変更について例えば Tamura (2000: 28) によると、話題 (*topic*) や注目の焦点 (*focus of attention*) などがコンテキストによって語順を変えることがあるという。ただし、語順変更は動詞および、その動詞と関係している要素のみで行われるそうである。特に下のような主語－補語－コピュラ (*Subject-Complement-Copula*) 文の際は語順変更が見られる。(Tamura 2000: 29.)

(31) *isam kuni p ruyanpe kamuy ne wa...*

NEG.exist OBL thing storm god COP FIN

‘It was thought, it would be good if there were no storms, and...’

(Tamura 2000: 29) ²⁵

(31) を元の形に戻してみれば、「*ruyanpe kamuy isam kuni p ne wa*」のような語順は通常であろう。

23 Bugaeva (2013) では *uske* は厳密に「場所 (*the place of*)」と意味する文中ではコピュラの *ne* と同時に現れると進行相 (*progressive*) の意味もしているという。田村 (1996) によると、*uske* は形式名詞であり、動作の場所・時間などを示す場合もあるという。

24 アイヌ語音声資料』(1～6) の語彙下巻, O-Z では、このような構造が 5 件見られ、全ては *somo ka... kunak ramu* という形をしている。

25 本来太文字となっている。

ここで否定動詞が含まれている名詞句 *isam kuni p* は文頭に挙げられており、文の焦点はこれに当たるのという。否定動詞 *isam* のスコープを考えると、形式名詞 *p(e)* が作る名詞句の右側に広がらないのであろう。つまり、文頭に来る補語 *isam kuni p* が主語の *ruyanpe kamuy* についての望ましい性質を示しているが、構造的にみれば *isam* がここで *kuni p* あるいは *p* に当たり、*ruyanpe kamuy* がスコープ外にある。この根拠になれるのはもう一つの可能な解釈である：(31) の *isam kuni p* が、元の形で補語だが、新しい語順で主語となり、*ruyanpe kamuy* が主語から補語にさげられるというものではないか。次の用例も同じ構造をしている。

- (32) *aoka anakne, somo a-ki kuni p tonokouymam ne na*
 we TOP NEG IND.A-do OBL thing going.to.trade COP FIN
 ‘私達は和人の所へ交易に行ってはいけないのだよ’

(田村 1986: 6)

(32) でも同じように、否定が文頭に挙げられている。統語的に、ここでも *somo* のスコープは名詞句の外に広がっていないといえる。*anakne* は話題 (topic) を示し、*aoka* は複数一人称を表す代名詞である。直訳すれば「(私達は) するまいものが和人の所へ交易に行くことだよ」となるであろう。つまり、ここで否定が文頭に挙げられているのは、否定を強調するためなのではないか。(31) に似たように、NEG *kuni p* とはその後に来る動詞句である。田村はこれを日本語の「してはいけない」という禁止構造として扱っている。*kuni p ne (na)* は確かに暗示的な命令 (implicit imperative) の際に用いられるが、モダリティも示す。また、同じコンテキストですぐこの文の後に、*iteki e-tonokouymam yak pirka na* (PROH 2SG.A-going.to.trade FCND be.good FIN) となっており、この禁止の前提として用いられていると考えらる。²⁶

以上、*somo* + VP および *iteki* + VP のような否定表現を主に扱ってきたが、*ka somo ki* について一つの用例をみてみよう。上記、アイヌ語の否定の焦点については、「*ka somo ki*」構造で用いられている副詞 *ka* が焦点を示すと述べたが (例えば奥田 1997, Bugaeva 2012)、*somo* + VP および VP + *ka somo ki* が同じ文脈に現れている用例を考察してみよう。

- (33) *iyohay somo somo! somo ku-kor wa kusu ku-ye ka somo ki.*
 INTRJ NEG NEG NEG 1.SG-possess CON reason 1.SG-say even NEG do
nakanaka ku-kor rusuy sekor ku-hawean ka somo ki p
 nakanaka 1.SG -possess DES QUOT 1.SG -say even NEG do thing

26 ここで扱っているすべての用例は、否定副詞あるいは禁止副詞がそのまま動詞と現れるものだが、*ka somo (ki)* という構造の *ka* は「否定の焦点を示す」(奥田 1997: 202) とされているが、*ka* の直前の要素・句はその焦点となっているのかについてまだ研究する必要がある。

hemanta ne ku-kor hawe an? somo somo ku-kor

what COP 1.SG-possess NMLZ exist NEG NEG 1.SG-possess

‘あらあらだめだめ！持たないからこそ言わなかったのよ。ナカナカがほしいとは私は言わなかったのにどうして私が持つっていうの。私はいらんいらん。’

(田村 1984: 62)

ここでは、対話者の二人が言葉遊びをし、話し手は「*nanaka*」というものの所持について述べている。まず、*somo* が間投詞のように対話相手の命題を否定するために用いられ、しかも強調のために二回も使われている。次、*somo ku-kor* により「*nanaka* を持つ」という命題が否認され、*wa kusu* が理由を示し、*ku-ye ka somo ki* では「*ku-ye*」が強調されている。つまり、動詞句に焦点を当てるのにアイヌ語は *ka somo ki* が用いられている。同じように、2 行でも *nanaka ku-kor rusuy sekor ku-hawean ka somo ki* においては、*ki* の目的語には *ka* の前の動詞句が当たり、そのすべてが否定の焦点になっているといえる。最後の「*somo somo ku-kor*」では、否定辞が二回用いられているのも強調的な意味を持っているといえる。

4.3 二重否定のような構造

上記で述べたように、禁止文は一般的に禁止副詞 *iteki* を対象となる動詞句の直前に置くことによって成立される。しかし、(34) には禁止副詞と共に否定副詞も現れている。

(34) *iteki cape haw ki hani! iteki cape haw e-ki somo ki yakne, icen*

PROH cat voice do FIN PROH cat voice 2.SG-do NEG do FCND money

poronno a-e-kore kusu ne na

a.lot IND.A-2.SG.O-give reason COP FIN

‘ネコの鳴き声をするんじゃないよ。おまえさんがネコの鳴き声をしなければ、お金を沢山挙げるからね’

(田村 1986: 22)

(34) はかなり珍しい禁止副詞及び否定副詞が同じ文に現れている構造である。ここで現れている *somo* は助動詞 *ki* と高橋 (2016) が呼ぶ分析的否定構造を成し、二重否定のような構造になっている。²⁷ なお、禁止文の際は、普段主動詞は人称接辞を持たないにもかかわらず、「*iteki cape haw e-ki*」となっている。そのため、2 行目の *iteki* を単独に現れている要素として扱えば、その後に「*cape haw e-ki somo ki yakne*」というのは統語的に問題もなく、「猫の鳴き声をしなければ...」という意味になる。しかし、一つの文のように発言されることから、どのように捉えるべきかはまだ疑問で

27 (26) の *iteki Penanpe V* と同じ語順だが、(26) は自動詞であり、(34) における *ki* は他動詞で、*cape haw* が目的語となっている。

あるといえる。²⁸ (34) 以外に似たような構造は今回の研究資料の中で二つ程度現れており、(35) はその一つである。

- (35) *hawe ne yakun, te wano anakne, herepasi*
 NMLZ COP if now from.onwards TOP go.to.beach
hetopo eci-paye hawe ne yakun, iteki, tan mosir un
 coming.back 2.PL-go.PL NMLZ COP if PROH this land DIR
somo eci-yap nankor
 NEG 2.PL-come.ashore probably
 ‘それじゃあ、今後は、沖の方へ行くというのなら、もうこの島へ来るんじゃないぞ’
 (田村 1986: 46)

これも田村(1986)によると禁止表現となっており、「しないこと」を禁止しているのではなく、肯定の行動が禁止されているという。当然、コンテクストをみると、否定が禁止されると意味すれば、ストーリーが不思議になる。なので、これらの例は話者が間違えて *somo* も加えた可能性があると考えればよいかもしれない。もう一つ考えられる説明は、一方の否定辞は否定の意味を持たない虚辞的否定 (*expletive negation*) となっていることである。また、音声を聞くと *yakun* および *iteki* および *tan mosir un* の3つの要素の間に短いポーズが聞こえる。という、*iteki* が単独で現れている間投詞のような振舞をしている可能性もあるのではないか。*iteki* のみの禁止構造と比べれば、(35) は強調などの意味が含まれているのかは、さらなる研究が必要である。また、『アイヌ語音声資料 1-6』の中ではこのような構造が3件しか見られないので、あまりに用例が少なすぎるので根拠が薄い。そのため、他のアイヌ語資料も十分に調べる必要があると思う。

さらにこの用例をみると、否定とモダリティ要素が同時に現れている。*nankor* は一般に推測 (*conjecture*) を表す助動詞とされているが、命令的な表現を作るのに使うことができ、暗示的な命令表現の一種になる。Tamura (2000: 243) によると、主動詞に2人称接辞を付け、*nankor* (*na*) を最後に置くと「話し手が聞き手に何かをさせようとする」時に使われるという。

5. 他の注目すべき否定構造

ここで紹介する用例は、まだ解決できていない点が多いと思われるものである。例えば (36) は特に物語の中で頻繁に目にする構造で、特別な語用論的な意味を成している。物語の最初に伝えられる主人公の背景や家族関係など、その物語の開始点 (*starting point*) のような説明の中には次のような否定の使い方がみられる。

28 音声資料を聞く際も、[*iteki cape haw e-ki*]と[*somo ki yakne...*]の間にはポーズもなく、一つの文のように発言されている。

- (36) *a-hokunispake ka ison wa*
 IND-husband even be.a.good.hunter CON
easir, nep a-kor rusuy ka somo ki. (--)
 entirely what IND.A-possess DES even NEG do
a-hokuhunispake ka, ison pe ne kusu, kam hene,
 IND-dear.husband even be.a.good.hunter thing COP reason meat or
cep hene, kina haru hene a-e rusuy ka somo ki no (--),
 fish or edible.grass crops or IND.A-eat DES even NEG do CON.NEG
 ‘主人も獲物がよくとれて、私たちは何も欲しいとも思いません。(--) 主人も獲物がよくとれるので、肉でも、魚でも、野菜でも、食べたいとも思わず (--)’

(田村 1985: 16)

ここでは、まず「*nep a-kor rusuy ka somo ki*」及び「*a-e rusuy ka somo ki (--)*」という否定文が現れている。前者の否定は厳密にいうと「私達は何も欲しくない」と意味し、後者は「肉や魚や野菜を食べたくない」のような意味をしている。しかし、田村（1985）によれば、これらは語用論的に「食べ物に不自由をしない」と意味し、「食べる」という動作をする意欲を持っているのではない。論理的にも、夫が獲物を多く獲れるにもかかわらず、「食べたくない」というのはやや違和感もある。なので、「食料が豊富にあるので、お腹も空かない」や「物が十分にあるので、（他には）欲しくない」のような暗示的な意味、つまり語用論的な意味が含まれているのではないか。このような使い方がおそらく昔話や物語に限る可能性があるが、本来日常的な会話では似たような語用論的な意味で使われていたのかは、研究がまだ足りない。しかし、多くの物語にも表れている構造なので、このような決まったコンテキストでは日常的にも使用することができる可能性が完全にはないわけではないと思う。

もう一つ注目したいのは *ciki* についてである。*ciki* というのは一般に要求や命令や疑問の際に使われている（Tamura 2000: 165–166）が、特に疑問の際に *somo* と同時に現れる時もある。そういう時は「*ciki somo... na/ya*」のように文中で現れるが、下記では主人公の考えの中では終助詞が入っていない。*ciki* 自体は条件節を作る「…したら」を意味する接続助詞の一つであり、その後に要求表現が来るという（田村 1996）。すなわち、「条件 X が達成するなら、Y をしなさい」あるいは「X の条件であれば、Y だろう」のような文を作ることが多い。

- (37) “*ney ta ka arpa-an wa, ne nupuri, a-turasi wa,*
 where LOC even go-IND.S CON that mountain IND.A-ascend CON
nupuri tapka a-osikiru ciki somo ene kamuy ewak ,
 mountain peak IND.A-reach if NEG like.that god live.in

sir oka hi a-nukar ya!" sekor yaunu-an kor patek an-an
 place be.PL NMLZ IND.A-see Q QUOT think-IND.S PROG only exist-IND.S
 ‘『いつか行って、その山を登り、山の上へ向かって行ったら、神様が住む所がどんなだか、
 見られないだろうかなあ』 と思ってばかりいました。’

(田村 1985: 54)

ここでみられるのは田村 (1996) でも説明されている通り、「*ciki somo ... ya*」となっており、願望を示す際に用いられている構造である。統語的にみると、*somo* は何を否定しているのかを分析するのは簡単ではない。一応、*hi* が名詞化を行う形式名詞のため、「*ene kamuy ewak sir oka hi*」が *a-nukar* の目的語となっていると分析できるので、主動詞から遠くあるにもかかわらず、*somo* がこの動詞句を否定しているとはいえるのではないか。そして、疑問を示す *ya* が最後に置かれており、音声的にやや長く発音され、しかもアクセントが高めのものである。次の用例においては、「*ciki somo*」が文末に現れている。

- (38) *Piratur ta nupur ekasi an hi a-nu p ne a hi kusu*
 Biratori LOC mountain old.man exist NMLZ IND.A-hear thing COP PAST NMLZ reason
 “*eun hene a-tura ciki somo" sekor ramuan-an kus*
 to.there or IND.A-take.with if NEG QUOT think-IND.S reason
 ‘平取に占いのできるおじさんがいるのを聞いていたものですから”そこへでも連れて
 行ったらいいのではないか” と思いつきましたので (--) ‘

(田村 1989: 4)

このように、*somo* が *ciki* と共に現れているが、ここで「…したら良いのではないか²⁹」という語用論的な意味を成しているという。つまり、こういう場合は *somo* が別に述語を否定する役割を持つのではなく、*ciki* と一緒に一つの語用論的意味合いを成立させているようであり、このコンテキストにおいては付加疑問 (*tag question*) としても解釈できるのではないか。

次の用例では否定副詞 *somo* が「*yak wen*」と共に現れており、田村 (1984) によれば義務・必要性を表している。構造的に例えば日本語にも「～しなければならない、～といけない」というのは、形態的に否定要素が含まれているが、語用上で否定の意味がない。

29 例えば田村 (1996) では「…すれば (…なるのではないかなあ)」のように、願望を表すとされている。

- (39) *akusu okkayo e-ne hine ora somo a-e-hosipire yak wen wa*
 and.then man 2.SG-COP CON then NEG IND.A-2.SG.O-give.back if be.bad CON
kusu, e-onaha un e-hosipi oasi hawe, a-e-kaspaotte hawe ne na
 reason 2.SG-father DIR 2.SG-return start NMLZ IND.A-2SG.O-order NMLZ COP FIN

‘すると、お前は男の子でそれから返さないといけないから、お前の父親の許へお前が帰ろうとすることを、私はお前にいいつけるのだから…’

(田村 1984: 36)³⁰

(39) では、「*somo a-e-hosipire yak wen wa kusu*」の中では、まず主動詞の *hosipire* は *somo* で否定され、その後ろの *yak* によって可能性また仮定的な条件を表す。次に否定的な意味を持つ自動詞 *wen* 置くと、前の要素の結果として捉えることができる。すなわち、「Xをしないのなら、悪いことが起こる / 悪い結果に至る」のような意味合いであると考えられる。田村 (1996) では *yak wen* は「…するといけない」のように訳されているが、より具体的に要素を分析してみれば、筆者の説明にも至ることができるのであろう。*wen* は否定要素のわけではないが、否定的な意味を持っているとはいえる。同じように「*yak pirka* (FCND be.good)」というのは「…すると良い、するが良い、する方が良い」という意味をする肯定的な話し手の意見を表す陳述文を作る。最後に、実際の二重否定が起きている用例を紹介する。

- (40) *a-onaha ye p a-unuhu ye pa*
 IND-father say thing IND-mother say OBJ
somo a-nu ka eaykap pe ne kusu
 NEG IND.A-listen even not.able thing COP reason

‘父の言うこと、母の言うことを、聞かないわけにもいかないものですから…’

(田村 1985 : 24)

この構造をみると、*ka* がその前にある動詞句を名詞化し、*eaykap* はそれを否定するというように分析できる。*nu* は他動詞で、前の *a-onaha ye p a-unuhu ye p* はその目的語となっている。田村 (1985) ではこれが「わけにはいかない」のように訳されているが、語用論的に必要性・義務のような意味を表すのではないか。つまり、この文脈では、主人公は「親のいうことを聞く必要がある」と解釈できると考えられる。ところが、*easirki* という義務制を示す助動詞も存在しているにもかかわらず、ここで否定が用いられているのはなぜなのであろう。また、アイヌ語が認知的にこのように否定を二重否定を通じて義務制を表すのはどの程度一般的なかはさらなる研究が必要である。

30 他にも似たような構造が見られる:

e-uk somo ki yakne wen ruwe ne na
 2.SG-pick.up NEG do FCND be.bad NMLZ.EV COP FIN
 ‘お前がとって来なければいけないのだよ’ (田村 1988 : 12)

6. まとめ

本研究では、ややおろそかにされているともいえる否定という普遍的言語現象を類型論的観点から調べて来た。アイヌ語は一般に *somo* や *iteki* という副詞が否定文・禁止文を作るとされているが、これら以外にも様々な形で否定が現れている。本研究は Miestamo (2016) による研究対象となる言語の否定表現を研究する際に用いられるアンケート (*Questionnaire for describing the negation system of a language*)³¹ を用いて、アイヌ語の否定表現をまとめてみた。下にこの研究結果をまとめた。

アイヌ語における否定

文否定

標準的否定

- 副詞 *somo* を主動詞の直前の位置に
- 人称・数など語形変化を行わない
- 対称的

否定的命令 / 禁止

- 副詞 *iteki*
- 懸念の際：副詞 *ikiya*
- 複雑構造： *iteki... yak pirka (na)*
somo VP p(e) ne (na) など

接続表現

somo + V + *wa/hike/no* + V

特別な文否定

(*ka*) *somo ki* 構造：VP の直後

従属節

標準的否定, 自立した語彙的否定動詞

他の文否定

否定動詞

- 自立した語彙的否定動詞³²

非文否定

否定的回答

否定副詞 *somo*, 否定的動詞 (*isam* など)

欠格表現

- 限られている場合自動詞に反動的な接尾辞 *-ko*

その他の側面

スコープと焦点

スコープ：主動詞句のみ，従属節に広がらない

例外：複雑述語の場合は広がる場合もある

31 本来ウラル語族の諸言語の否定表現をまとめるためのガイドラインだったが、他の言語にも利用できると Miestamo は指摘している。

32 本研究では統語的否定を中心としているため、それほど触れていない。自立した語彙的否定動詞の例として典型的なのは例えば *isam* である。

	焦点 : <i>ka somo ki</i> の対象になる句
	語順 ; 否定副詞の位置 (?)
否定極性	接続表現 <i>no</i> ; 「 <i>somo V no</i> 」 ³³
否定の強調	文頭の位置 + 法 : <i>NEGV/NEG + V + OBL + p(e)</i>
	否定の接助 <i>ka</i> : 「 <i>ka somo ki</i> 」
法・相	(不) 可能を表す <i>eaykap</i> , など否定 (助) 動詞
	否定 + <i>no</i> + VP (状態アスペクト)
	義務性 : <i>somo VP + eaykap</i>
	<i>somo VP + yak wen</i>
対比表現	<i>NEGV/somo + V + no</i> (... せずに / する代わりに)
慣用的	確認・願望 <i>ciki somo</i> (... のではないか)
	<i>somo ka + ramu/yaynu</i>
コンテキスト次第	単独の <i>somo</i> , <i>iteki</i> (間投詞, 動詞句の振舞)

先行研究にも指摘されているように、*somo* を通して作られるアイヌ語の標準的否定は一般に対照的であるとはいえるが、*ka* が必ずしも常に肯定文に現れるわけではないので、強調を示す場合もあるといえるであろう。また、*somo* は一般に述語の直前に置かれる傾向が強く、人称接辞などを持たず、語形変化なども行わない。さらに、否定的な命令は、一般的に *iteki* という副詞を *somo* と似たように動詞句の直前という位置に置かれるのが一般的だが、単独で現れることもあり、間投詞の振舞及び、前に来る動詞句の否定化したその主動詞が省略されている句としても振舞うことができる。

様々な否定の面についてまとめることができたが、さらなる研究が必要な面も残っている。例えば、否定の焦点に関してはまだ多くのことが未解決である。アイヌ語は音声的強調による情報的焦点や比較的焦点などが存在しているのかというのは一つの今後の課題である。しかし、昔の録音は圧倒的に多いのは昔話や物語であるため、日常的な会話あるいはそのアイヌ語母語話者である語り手自身の話が少ないので、自然な焦点を示す音声的強調がみられるかについては今後の課題とした。さらに、アイヌ語は否定極性項目 (*NPI, negative polarity items*)³⁴ が存在しているのか、どのようなものがあるのかというのも今後の課題である。本研究においてはアイヌ語の否定表現について類型論的にまとめることができたが、語用論的観点、そして認知言語学的観点などからも否定をさら

33 しかし、肯定文にも *no* が使われる場合があり、状態的な事象の表示として用いられる (高橋 2016: 76)。

34 否定極性項目 (五十嵐 2020: 64; 太田 1980 では「否定対極表現, *Neg polarity expression*」) とは肯定文では現れるが肯定文では現れない表現のことを示す。日本語では、たとえば「決して」というのはもっぱら否定に伴ってあらわれる (太田 1980: 281)。

に考察する必要があると思う。

略語一覧

1：1人称, 2：2人称, A：他動詞の主語, ABL：奪格, ADV：副詞, CAUS：使役, CON：接続, COP：コピュラ, DES：願望, DIR：方向格, EMPH：強調, FCND：未来条件 (*future conditional*), FIN：終助詞, IMP：命令, IND：不定人稱, INTRJ：間投詞, LOC：場所格, NEG：否定, NMLZ：名詞化辞, O：目的語 (A に対して), OBJ：目的辞, OBL：義務制, PAST：過去, PL：複数, POL：丁寧, Q：疑問詞, QUOT：引用詞, REQ：要求, S：自動詞の主語, SG：単数, TOP：話題

参考文献

調査資料

- 田村 すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料』 1. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.
田村 すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料』 2. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.
田村 すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料』 3. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.
田村 すず子 (1987) 『アイヌ語音声資料』 4. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.
田村 すず子 (1988) 『アイヌ語音声資料』 5. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.
田村 すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料』 6. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.

他の参考文献

- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』 大修館書店, 東京.
萱野 茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典』 東京: 三省堂.
岸本 宜久 (2017) 「アイヌ語の複雑述語における接続と接合」 『北海道言語文化研究』 15, 49-70.
岸本 宜久 (2019) 『アイヌ語の複雑述語の研究』 博士論文, 北海道大学文学研究科.
奥田 統己 (1997) 「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 第3号, 195-214.
佐藤 知己 (2007) 「再びアイヌ語千歳方言の aspekto について－特に完了を表す形式をめぐって－」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 第13号, pp. 1-14.
佐藤 知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 大学書林, 東京.
高橋 靖以 (2014) 「アイヌ語十勝方言における名詞化節の脱従属節化」 『北方言語研究』 4, 149-155.
高橋 靖以 (2016) 「アイヌ語十勝方言の否定構造について」 『北方言語研究』 6, 73-79.
田村 すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.
沼田 善子 (2000) 「否定の表現」 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 岩波書店, 東京.
Akulov, Alexander (2017) The verb of Kuril-Kamchatka Ainu: a general overview. *Cultural Anthropology and Ethnosemiotics* 3 (1): 2-21.
Bugaeva, Anna (2012) Southern Hokkaido Ainu. In: Nicolas Tranter (eds.) *The languages of Japan and Korea*, 461-509. Routledge, London and New York.

- Bugaeva, Anna (2013) Adnominal clauses and the ‘mermaid construction’: grammaticalization of nouns. 『国立国語研究所共同研究報告』 13-01: 667–675.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: an introduction, volume I*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Honda, Isao (1996) *Negation: a cross-linguistic study*. Doctoral Dissertation, State University of New York at Buffalo.
- Horn, Laurence R. (2010) *The expression of negation*. De Gruyter Mouton, Berlin and New York.
- Huddleston R. & Pullum G. K. (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Kishimoto, Hideki (2018) 「Projection of negative scope in Japanese」 『言語研究』 153: 5–39.
- Kwong, Yan Kit (2017) Lexical negative verbs in Ainu language. *International Journal of Humanities and Social Science* 7 (2): 166–172.
- Miestamo, Matti (2004) Suomen kieltoverbikonstruktio typologisessa valossa 「フィンランド語の否定動詞構造－類型論的観点から」. *Virittäjä* 3/2004: 364–388.
- Miestamo, Matti (2005) *Standard negation: the negation of declarative verbal main clauses in a typological perspective*. De Gruyter Mouton, Berlin and New York.
- Miestamo, Matti (2016) *Questionnaire for describing the negation system of a language*. Available online at <<http://tulquest.huma-num.fr/fr/node/134>> (Accessed 10.9.2022)
- Miestamo, Matti (2022) Negation and negatives. In: Marianne Bakró-Nagy, Johanna Laakso and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford guide to Uralic languages*, 922–935. Oxford University Press, Oxford.
- Roitman, Malin (2017) *The pragmatics of negation – negative meanings, uses and discursive functions*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia
- Takahashi, Yasushige (2022) Aspect and evidentiality. In Bugaeva, Anna (ed) *Handbook of the Ainu Language*. De Gruyter Mouton, Boston and Berlin pp. 613–627.
- Tamura, Suzuko (2000) *The Ainu language*. Sanseido, Tokyo.

(2022 年 9 月 30 日受付、2023 年 1 月 5 日審査終了)

A typological view on negation in Ainu

Jussi Nurmi*

ABSTRACT

This study concentrates on the area of negation, which has not been yet researched to a great extent in Ainu, from a typological point of view. Negation does not merely present the truth value of an assertion but has various pragmatic meanings depending on the context. This study makes use of Miestamo's (2016) method for describing the negation system of a language, in an attempt to give a general description of negation in Ainu. Special attention will also be given to constructions that syntactically are negative but pragmatically not so, which earlier research and grammars of Ainu mostly have ignored. This paper tries to give a more concise description of negation in Ainu. Furthermore, in order to study negation in Ainu, a variety of genres of texts were analysed. As this study provides a generalization of syntactic negation in Ainu, it also points out aspects of negation which require further investigation.

Keywords: Ainu language, negation, typology, pragmatics

* Doctor's Course, Hokkaido University

** This work was supported by JST SPRING, Grant Number JPMJSP2119.